

# 患者ら勇氣もらった

小林麻史さんの訃報に、乳がん患者から惜しむ声が上がった。医師らは乳がんに対する社会の関心が高まったことを評価した。

「頑張っている姿が伝わってきて、励まされた」。こう語るのは、京都市在住の乳がんて闘病中の女性(29)だ。26歳でがんが見つかり、乳房を切除する手

術を受けた。いまもホルモン治療を続ける。

麻史さんのブログにはこまめに目を通し、笑顔の写真が公開されると「しんどい時ほど笑いたい気持ちになるんだよなあ」と自分の姿を重ねた。仲間と作った若年性乳がん患者の交流会では、いつもブログが話題になった。訃報を受け「『いつかこの日が来るかもしれない』と思っていた。でも、やっぱり元気になってほしかった」と悼んだ。

大阪医大(大阪府高槻市)の岩本充彦医師(51) 〓乳腺外科〓は「がんと聞いてすぐに死をイメージされる方も多い中、進行し転移がありながらも元気な姿をブログで発信され、『勇氣をもらった』

という患者さんは多い」と話した。

神戸市東灘区でがん患者や家族・遺族らの悩みを聞く「御影がんカフェ」こころのともしび」を開く笹子三津留・兵庫医大特任教授(66)は「甘えたい盛りのお子さんを残して逝くのは、本当につらいだろう」と話し、麻史さんや同じ境遇の人の心情をおもんばかった。残された夫の市川海老蔵さんについても「男性は家庭の外で私

的な悲しみを表にせず頑張る人が多い分、つらい思いがたまるのではないか」とし、似た経験を持つ人々と気持ちを分かち合うことが大切さを強調した。

【大久保昂 池田知広、松本杏】